

[Original Paper]

A father's consciousness of child care and family life

— A comparative survey on Japanese and Korean in the Osaka area —

Yumi Cho*, Eiko Nishino* and Yumi Hiruta*

* Aino Gakuin College

Abstract

We surveyed on the father's consciousness of child care and family life with 100 Japanese and 74 Korean in the Osaka area, and analyzed the difference in the characteristics of ethnicity. Results were the following : generally, there were not much differences in family life style between Japanese and Korean ; mostly mothers took care of children. Japanese fathers had more contact with their children, but felt mentally far from them than Korean fathers. Korean fathers had not much contact with their children because of their busy business, but did not feel far from their children as compared with Japanese fathers. It was suggested that Korean fathers inherited the spirit of Confucianism and had an certain image of the father in Confucianism family, Japanese fathers had no certain image of the father and was seeking for an image of the new type of fathers. This survey clearly showed that there was a characteristic difference in child cares and in father's consciousness of child care between Japanese and Koreans, probably due to Confucian ideas.

Key words : father, child care, Korean, Japanese, ethnicity, confucianism

〔原 著〕

父親の子育てと家庭生活に関する意識

——大阪を中心とした日本人と在日韓国・朝鮮人の比較調査——

曹 裕 美*, 西 野 英 子*, 蛭 田 由 美*

【要 旨】 大阪を中心とした日本人の父親100名, 在日韓国・朝鮮人の父親74名を対象に子育てと家庭生活に関する意識調査を行い, 民族的な特徴について分析した。結果は次のとおりであった。家庭生活全般にわたって, 日本人と在日韓国・朝鮮人の父親に大きな違いはみられず, 子育ての多くを母親が担っていた。日本人は在日韓国・朝鮮人に較べて, 子供との関わりは多いが心理的な距離感を持っている父親が多かった。在日韓国・朝鮮人は日本人と較べて, 仕事が忙しいという理由で子供との関わりは少なかったが, 子供との心理的な距離感を持つ父親は少なかった。在日韓国・朝鮮人は儒教精神を受け継ぎ, 儒教的家族における確たる父親像を持っており, 一方, 日本人は明確な父親像を持たず, 新しい父親像を模索していると推測された。本調査は日本人と在日韓国・朝鮮人の父親の子育てを比較することによって, それぞれの子育てを特徴付けている民族性を明らかにした。

キーワード: 父親, 子育て, 在日韓国・朝鮮人, 日本人, 民族性, 儒教

はじめに

近年, 少子高齢社会の到来とともに, 家族の形態と機能が大きく変化し, 子どもの心身の発達上の問題や親子関係の問題が増大している。このような社会の大きな変化に伴い, 父親の役割, 父親に対する期待も徐々に変化し, 父親の積極的な育児参加が望まれるようになってきた。現在の日本社会では, 「男は仕事, 女は家庭に専念すべき」といったような, 男女の役割意識は少しずつ薄れてきつつある。近年父性研究が少しずつ行われるようになり, 子育てに積極的に取り組む父親の姿も見られるようになってきたが, 女性は仕事をしても, あくまでも家庭が中心といった意識は根強く残っている。そのため現在のところ, 皆で子どもの成長を見守るという, 地域ぐるみの子育て体制は整っておらず, 性別役割分業体制の下, 孤立無援の

母親が子育てに専念しているのが現状である。

日本女子社会教育協会(1995)は, 日本, 韓国, タイ, アメリカ, イギリス, スウェーデンの6ヶ国の国際比較調査を行い, 1日に父親が子どもと過ごす時間は3.3時間と日本が最も短いことを報告した。また, 子育てに関する父親, 母親の役割分担状況を見ても, 「生活費の負担」を除くすべての調査項目で, 「主に母親がする」割合が「主に父親がする」割合を上回っていた。このようなことから, 父親の家庭での存在感は母親の存在感に圧倒されている様子がうかがえる。

現在日本には625,422人の韓国・朝鮮人が在住している(法務省, 2002)。在日韓国・朝鮮人は, 特に伝統的に儒教精神を大切にし, 儒教的家族体制のもとで子どもにとっての父親は近寄りたがいない存在であり, 夫は一家の大黒柱として外で働き, 妻は家庭を守るといった性別役割分業の考えが強かった。上述の日本女

* 藍野学院短期大学

子社会教育協会の国際比較調査の結果でも、韓国の父親は子どもと一緒に過ごす時間が日本に次いで短く、3.6時間であった。しかし在日韓国・朝鮮人の場合、生活環境の変化や新しい家族形態によって、父親の子どもとの関わりや子育てに対する意識も変化してきていると思われる。父親による育児は、時代の変化に応じてどのように変化し、異文化間の融合はどのように起こるのかを明らかにすることは興味深いことである。

そこで私達は、現在の父親の子育てと家庭生活についての意識調査を行い、日本人と在日韓国・朝鮮人を比較検討し、時代的な変化、民族間の共通性と違いなどについて分析した。その結果、社会の国際化の中で、日本人にとっても在日韓国・朝鮮人にとっても、示唆に富む結果が得られたのではないかと考えられる。

I. 研究方法

1. 調査対象

日本人の父親は、大阪府茨木市の小学校児童生徒の父親100名であった。在日韓国・朝鮮人の父親は、大阪府下、奈良県の在日韓国・朝鮮人学校児童、生徒の父親74名であった。調査は質問紙調査で、全体の回収率は66.3%であった。

2. 調査内容

調査方法は、以下の内容で構成された調査票による、無記名自記式質問紙調査であった。

1) 家庭生活に関する内容

- (1) 休日の過ごし方
- (2) 平日の在宅時間（睡眠時間を除く）
- (3) 平日の子どもと過ごす時間
- (4) 親の介護
- (5) 妻の就労状況

2) 父親の子どもとの関わりに関する内容

- (1) 毎日の子どもとの関わりの実際
 - ①朝食 ②夕食 ③外食 ④会話 ⑤勉強
 - ⑥スポーツ ⑦家の仕事
- (2) 子どもの躰についての家族の役割分担
- (3) 子どもとの関係の持ち方

3) 父親の教育観および父親像に関する内容

- (1) 子どもに期待する人間像
- (2) 父親としての自己像

(3) 自分の小さい頃の父親のイメージ

(4) 教育観

4) 対児感情尺度による対児感情の測定

対児感情尺度は、花沢（1992）により開発された子供に対する感情を測定する尺度である。接近感情、すなわち子供を肯定し受容する方向の感情に関する項目14項目と、回避感情、すなわち子供を否定し拒否する方向の感情に関する項目14項目から構成され、各項目について「非常にそのとおり」（3点）から「そんなことはない」（0点）までの4段階で回答を求めるものである。接近感情と回避感情に分けて得点を集計した後、接近感情と回避感情の拮抗状態を算出する。接近感情、回避感情ともにスコアが高ければ高いほど、子どもに対する接近と回避の感情が高いことを表し、拮抗指数が高ければ高いほど、両感情が接近していることを表す。

3. 調査期間および分析方法

調査期間は、2002年7月1日から8月末日までであった。調査対象を、日本人グループと在日韓国・朝鮮人グループの2つのグループに分けて集計し、比較検討した。統計的有意差の検定には、カイ2乗検定およびt検定を用い、有意水準5%以下を有意差ありとした。

4. 倫理的配慮

調査は無記名で行い、データはすべて統計的に処理した。調査票には、調査に協力した父親の利益とプライバシーを侵害しないよう嚴重に配慮する旨を明記した。

II. 結果

1. 調査対象者の特徴（表1）

表1は調査対象の特徴を要約したものである

日本人の父親の平均年齢は36.0歳で、在日韓国・朝鮮人の父親の平均年齢は38.8歳であった。職種では、日本人は会社員が59.0%を占めており、次に公務員が25.0%、自営業が13.0%、その他2.0%であった。これに対し、在日韓国・朝鮮人では会社員が40.5%、自営業が32.4%、その他が27.0%であった。父親のきょうだい数の平均は、日本人は2.5人で、このうち長男は66.0%であった。在日韓国・朝鮮人は3.4人で、このうち長男は33.8%であった。子どもの

表1

項目	結果	
	日本人 n=100	在日韓国・朝鮮人 n=74
1 年齢構成	36歳以上	78 (78.0%)
	31～35歳	15 (15.0%)
	26～30歳	4 (4.0%)
	20～25歳	2 (2.0%)
2 平均年齢	36.0歳	38.8歳
3 職業	会社員	59 (59.0%)
	公務員	25 (25.0%)
	自営業	13 (13.0%)
	その他	2 (2.0%)
	無回答	1 (1.0%)
4 きょうだいの数の平均	2.5人	3.4人
5 子どもの数の平均	2.0人	2.1人
6 妻の就労状況	正社員・正職員	20 (20.0%)
	パート・アルバイト	32 (32.0%)
	自営業・内職	4 (4.0%)
	無職	43 (43.0%)
	その他	1 (1.0%)
7 韓国・朝鮮人の在日世代	2世	—
	3世	—
		43 (58.1%)
8 対児感情尺度得点	接近得点	24.3 (±8.4)
	回避得点	8.6 (±7.1)
	拮抗指数	25.0 (±14.7)
		22.6 (±12.1)

*p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

数の平均は日本人では2.0人、在日韓国・朝鮮人は2.1人であった。

対象の在日韓国・朝鮮人のうち二世が58.1%、三世が41.9%であった。

対児感情尺度の結果、日本人の父親は接近得点24.3(±8.4)、回避得点8.6(±7.1)、拮抗指数25.0(±14.7)で、在日韓国・朝鮮人の父親は接近得点26.4(±7.8)、回避得点8.6(±7.1)、拮抗指数22.6(±12.1)で、いずれも日本人と在日韓国・朝鮮人間の有意差はみられなかった。

2. 父親の家庭生活

1) 休日の過ごし方(図1)

休日の過ごし方では、「家族と外出する」という父親が、日本人69.0%、在日韓国・朝鮮人66.2%と最も多かった。次いで「家族と話をしたり、ゆっくり過ごす」は日本人47.0%、在日韓国・朝鮮人37.8%であった。両者ともに家族とともに過ごすと答えた父親が多く、両者に差はみられなかった。

「趣味のため外出する」と答えた父親は、日本人では36.0%、在日韓国・朝鮮人では51.4%で、在日韓国・朝鮮人の父親が有意に多かった(p<0.05)。「家

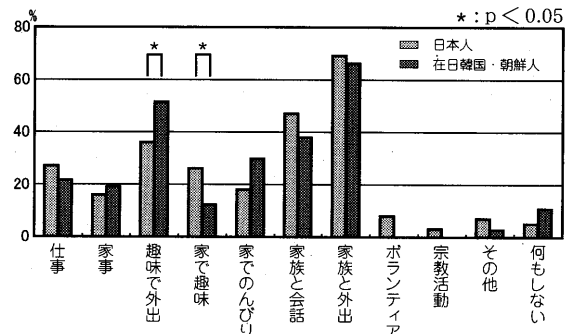


図1 休日の過ごし方

で自分の趣味のことをする」と答えた父親は、日本人では26.0%、在日韓国・朝鮮人では12.2%で、日本人の父親が有意に多かった(p<0.05)。いずれにしろ、この両者を合わせると、6割強の父親が外出あるいは家で自分の趣味のために休日を使っていると答えていた。

2) 平日の在宅時間

睡眠時間を除いた、平日の在宅時間は日本人では平均2～4時間が43.0%で最も多く、在日韓国・朝鮮人では平均4～6時間が44.6%と最も多かった。

3) 平日の子どもと過ごす時間

父親が平日子どもと一緒に過ごす時間(話をしたり、遊んだり)は、30分～1時間というものが最も多く、日本人36.0%、在日韓国・朝鮮人は40.5%であった。

4) 親の介護状況

親の介護をしている人は、日本人では7.0%、在日韓国・朝鮮人では5.4%で、していない人は、日本人36.0%、在日韓国・朝鮮人は35.1%であった。今後するつもりという人は、日本人が46.0%、在日韓国・朝鮮人が40.5%であった。

5) 妻の就労状況

妻の就労状況は、無職のものが、日本人では43.0%、在日韓国・朝鮮人では24.3%で、日本人と在日韓国・朝鮮人に有意に差がみられた(p<0.05)。在日韓国・朝鮮人は、パートタイムの仕事が45.9%と最も多かった。

3. 父親の子どもとの関わり

1) 毎日の子どもとの関わり (図2)

図2は、子どもとの関わりの頻度について、「ほぼ毎日」という回答の割合を示したものである。子どもと毎日会話をするという父親は、日本人は56.0%で、在日韓国・朝鮮人は43.2%であった。朝食を毎日子どもと一緒にするという父親は、日本人46.0%で、在日韓国・朝鮮人24.3%で、日本人が有意に多かった ($p < 0.01$)。夕食を毎日一緒に食べるという父親は、日本人が35.0%、在日韓国・朝鮮人23.0%であった。外食や子どもの勉強をみてやる、一緒にスポーツをする、家の仕事を一緒にするという回答は、日本人、在日韓国・朝鮮人ともに極少数で、「たまに」という父親がほとんどであった。

2) 子どもの躰についての家族の役割分担 (図3, 図4)

子どもの躰として挙げた項目は、(1) 部屋の整理整頓、(2) 帰宅時間、(3) 勉強をみてやる、(4)

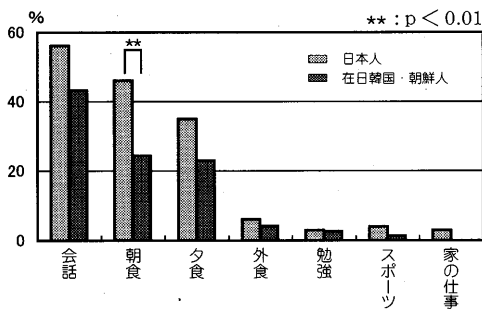


図2 毎日の子どもとの関わり

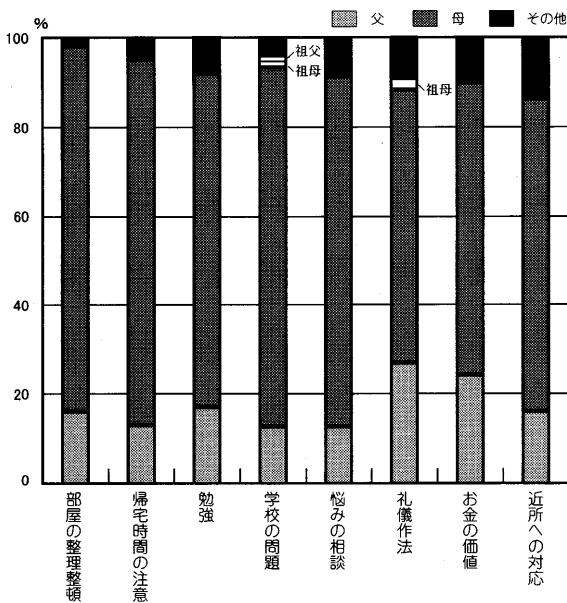


図3 躰の役割分担：日本人

子どもに問題が生じたとき学校へ出向く、(5) 子どもの悩みの相談にのる、(6) 礼儀作法を教える、(7) お金の価値を教える、(8) 子どもが近所に迷惑をかけたとき誤りに行くの8項目であった。これらの項目のなかで、「礼儀作法を教える」と「お金の価値を教える」「悩みの相談」を除いた5項目に関して、母親が行うという回答が75.0%から83.4%を示し、父親が行うという回答は10.8%から16.7%にとどまり、日本人と在日韓国・朝鮮人との間に差はみられなかった。

「礼儀作法をおしえる」は、他の項目に比べて父親の関与が高く、父親が行うという回答は日本人、在日韓国・朝鮮人ともに27.0%であった。「お金の価値を教える」についても父親の関与は比較的高く、父親がおこなうという回答は日本人24.0%、在日韓国・朝鮮人23.0%であった。

祖父母が関与する項目は、日本人家庭では「学校の問題」と「礼儀作法」の2項目で、在日韓国・朝鮮人家庭では「部屋の整理整頓」、「帰宅時間」、「悩み事の相談」、「お金の価値」、「近所への対応」の6項目であった。いずれも割合は極少数であった。

3) 子どもとの関係の持ち方 (図5)

子どもとの関係の持ち方では、子どもとの約束を守るという回答が、日本人、在日韓国・朝鮮人ともに89.0%で最も多かった。子どもが良いことをしたとき誉めてあげるという回答も多く、日本人91.0%、在日

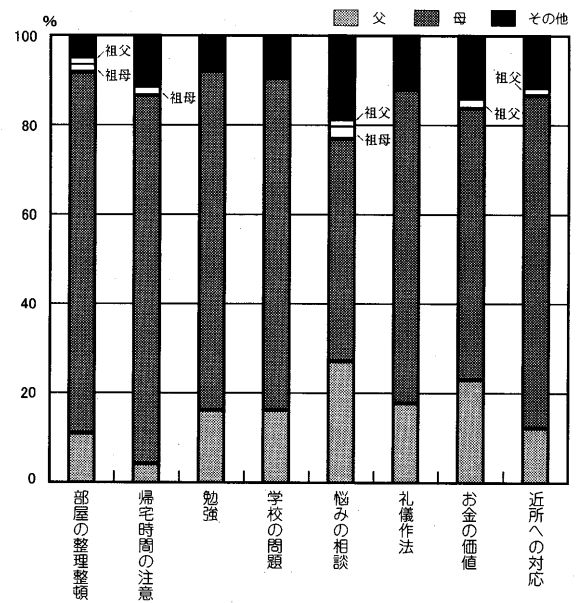


図4 躰の役割分担：在日韓国・朝鮮人

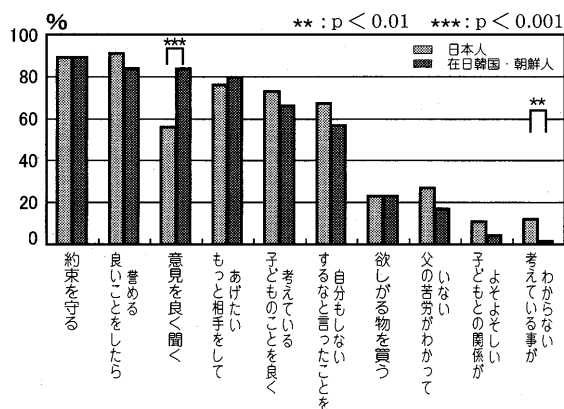


図5 子どもとの関係の持ち方

韓国・朝鮮人 85.0% であった。意見が食い違ったとき、子どもの意見を良く聞くという回答は、日本人が 56.0%，在日韓国・朝鮮人 83.8% で在日韓国・朝鮮人が有意に多かった ($p < 0.001$)。もっと子どもの相手をしてやりたい、子どもの事を良く考えている、子どもに「するな」と言ったことを自分もやらないという回答は、日本人、在日韓国・朝鮮人ともに約 56.8% から 79.7% であった。

上記6項目に比べて、以下の4項目は少数であった。すなわち、子どもがほしがる物をよく買ってあげる、子どもとの関係をよそよそしく感じる、子どもの考えていることがわからない、子どもは父親の苦労がわかっていないという回答である。子どもの考えていることがわからないという回答は、日本人 12.0%，在日韓国・朝鮮人 1.4% で有意に差がみられた ($p < 0.01$)。

4. 父親の教育観および父親像

1) 子どもに期待する人間像 (図6)

子どもにどのような人間になってほしいかという問いに対する回答は、「積極的な人」を除いて、日本人と在日韓国・朝鮮人の間に殆ど差はみられなかった。上位を占めたのは「思いやりのある人」日本人 63.0%，在日韓国・朝鮮人 70.3%，「責任感が強い人」日本人 44.0%，在日韓国・朝鮮人 45.9%，「友達がたくさんいる人」日本人 43.0%，在日韓国・朝鮮人 47.3%，「粘り強い人」日本人 37.0%，在日韓国・朝鮮人 36.5% であった。日本人と在日韓国・朝鮮人の間で差が見られた項目は「積極的な人」で、日本人が 34.0%，在日韓国・朝鮮人 17.6% で、日本人が有意に多かった ($p < 0.05$)。

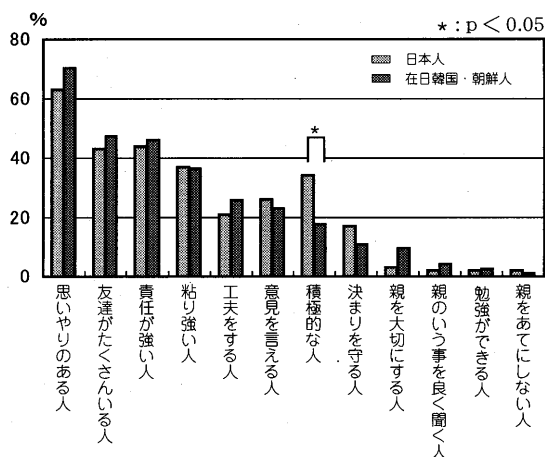


図6 子どもに期待する人間像

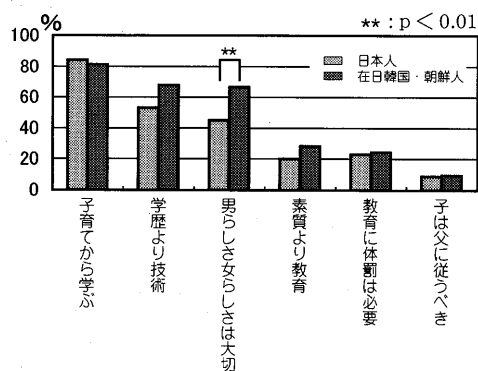


図7 教育観

2) 教育観 (図7)

子どもには高い学歴より専門的な技術を身につけさせるほうが良いという父親は、日本人 53.0%，在日韓国・朝鮮人 67.0% であった。子どもには男らしさ女らしさを身につけさせることが大切であると答えた父親は、日本人 45.0%，在日韓国・朝鮮人 66.2% で、在日韓国・朝鮮人の父親が有意に多かった ($p < 0.01$)。子どもがどう育つかは素質より教育にかかっているという父親は、日本人 20.0%，在日韓国・朝鮮人 28.0% であった。子どもは常に父親に従うべきであると答えた父親は、日本人 9.0%，在日韓国・朝鮮人は 9.5% であった。体罰は子どもの教育にとって必要であると答えた父親は、日本人 23.0%，在日韓国・朝鮮人 24.3% であった。

子どもを教育していると子どもから多くのことを学ぶ事ができるという父親は、日本人 83.0%，在日韓国・朝鮮人 81.1% を占めた。

3) 父親としての自己像 (図8)

自分をどんな父親と思うかという問いに対する回答

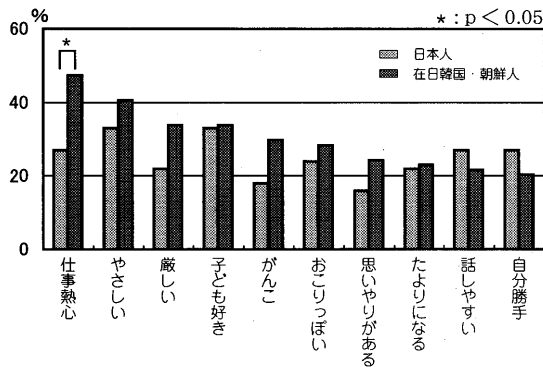


図8 父親としての自己像

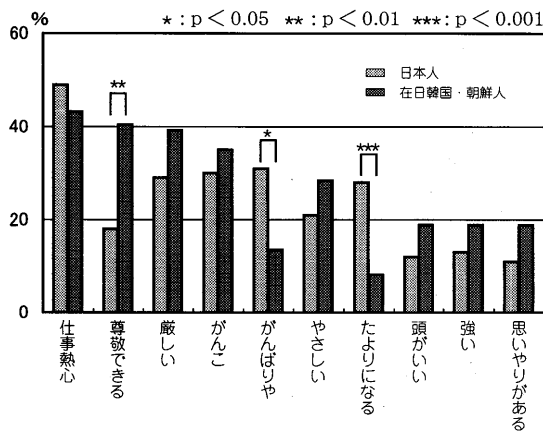


図9 自分の父親のイメージ

は、日本人と在日韓国・朝鮮人の間に殆どの項目に差はみられず、回答は多様であった。上位10項目を図8に示したが、最も多かった項目は「仕事熱心」で、日本人27名27.0%、在日韓国・朝鮮人35名47.3%で、この項目は在日韓国・朝鮮人が有意に多かった(p < 0.05)。続いて「やさしい」が日本人33.0%、在日韓国・朝鮮人40.5%、「子ども好き」が日本人33.0%、在日韓国・朝鮮人33.8%、「きびしい」が日本人22.0%、在日韓国・朝鮮人33.8%などであったが有意差はみられなかった。

4) 幼少の頃の自分の父親のイメージ (図9)

小さい頃あなたの父親はどんな人だったかという問いに対する回答も、回答は多様であった。上位10項目を図9に示した。上位をしめたのは、「仕事熱心」が日本人49.0%、在日韓国・朝鮮人43.2%、「きびしい」が日本人29.0%、在日韓国・朝鮮人39.2%、「がんこ」が日本人30.0%、在日韓国・朝鮮人35.1%などであった。有意差がみられた回答は、「尊敬できる」が日本人18.0%に対して在日韓国・朝鮮人40.5% (p

< 0.01), 「がんぱりや」日本人31.0%に対して在日韓国・朝鮮人13.5% (p < 0.05), 「たよりになる」が日本人28.0%に対して在日韓国・朝鮮人8.1% (p < 0.001)であった。

III. 考 察

1. 対象者の背景と家庭生活の特徴

本調査の対象者の違いは、職業構成と妻の就労状況、きょうだいの数であった(表1参照)。職業構成の特徴として、在日韓国・朝鮮人の父親は公務員がいないこと、自営業が多いことであった。これは、現在の在日韓国・朝鮮人が置かれている立場を反映していると考えられる。自営業の場合、家族との時間が定期的にとれなかったり、長時間労働になる傾向もあるのではないかと考えられる。反面、自営業の場合、店舗あるいは事業所が自宅と併設されている場合は、家族や子どもと近い距離で働いていることになり、子どもとの接触の時間は多くとれる可能性がある。したがって、子どもは、働く父親の姿を見て育つということになる。又、高畑(2000)は、在日韓国・朝鮮人の階層移動と民族関係の調査から、在日韓国・朝鮮人親族は生活全般において相互扶助を行うため、それを最大に機能させるのが自営業開業であろうと推測している。本調査では、子育てに関する親族間の相互扶助やその職業との関連にまで踏み込んでいないため、今後の課題である。

一方、日本人の父親は会社員が6割を占め、会社員と公務員を合わせて84.0%にのぼっているが、この父親の子ども達は、父親の働く姿を実際に見ることは殆どない。この状況をミッチャーリヒ(1963)は「父親不在」と呼んだのであった。職業構成という点からみると、日本人の父親は、在日韓国・朝鮮人の父親よりも「不在」の状態になりやすいと考えられる。

妻の就労状況は、日本人に較べて在日韓国・朝鮮人では、正社員・正職員、無職が少なく、パートタイムと自営業が多かった。正社員・正職員としての就職のチャンスが少なく、パートタイムを選ばざるを得ず、あるいは、夫である調査対象が自営業が多いことから、夫とともに自営業を営んでいるという実情を反映しているのではないかと考えられる。無職の母親の割合は、調査対象の年齢の影響を受けていることも考えられる。対象者の平均年齢に約3歳の違いがあることから、年齢の低い日本人女性の場合、小さい子どもを持っているものが多く、家庭で子育てに専念している母親が多

かったものと考えられる。

休日の過ごし方、在宅時間、子どもと過ごす時間、親の介護など父親の家庭生活に関しては、日本人と在日韓国・朝鮮人の間に殆ど差はみられなかった。調査対象となった在日韓国・朝鮮人の父親は、全員が在日2世、3世であった。日本で生まれ育った彼らは、家庭での過ごし方という点で、日本人との違いが殆どみられなくなっていると考えられる。

一方、年代的な変化をみると、1986年に総務庁が行った「子どもと父親に関する国際比較調査」(1987)では、日本の父親の休日の過ごし方として、自分の趣味のために時間を使ったり、一人で過ごす父親が多かったのに対して、本調査では日本人、在日韓国・朝鮮人ともに、家族と共に過ごす父親が7割近くに達していた(図1)。1998年に蛭田(2000)が首都圏を中心に行った調査でも、休日を家族と共に過ごす父親は7割を超えていた。ここ十数年で、在日韓国・朝鮮人だけでなく日本人の場合も、父親の子育て参加は着実に進んでいると考えられる。

2. 日本人と在日韓国・朝鮮人の父親の子育ての比較

会話、朝食・夕食をともにする頻度、スポーツや家の仕事をする頻度、勉強をみてやる頻度から、毎日の子どもとの関わりの実態をみた結果、「毎日している」という父親は、いずれの項目も日本人に較べて在日韓国・朝鮮人が少ない傾向がみられた。特に朝食をともにするという割合は有意に差がみられた(図2)。これは、前述したような父親の職業構成の影響と推測される。在日韓国・朝鮮人の父親は、公務員がいないことと、自営業が多い事が特徴であった。公務員のように定期的勤務時間を持てる父親と違い、自営業では定期的勤務時間が持たず、結果として子どもとの関わりの時間を犠牲にしているのではないかと考えられる。子どもとの関わりに積極的でない理由として、在日韓国・朝鮮人の父親は、仕事で忙しいからという理由を最も多く挙げており(47.0%)、日本人の父親(10.0%)との間に有意差がみられた。しかし、日本人の父親も決して子どもとの関わりの頻度が高いわけではなく、毎日会話をするという父親が56.0%でわずかに半数を超え、毎日朝食・夕食を一緒にとるという父親は半数にも満たなかった。仕事のために子どもとの関わりを犠牲にしているという点では、日本人の父親も同様である。

子どもの躾についての家族の役割分担、すなわち部

屋の整理整頓、帰宅時間の注意、勉強、悩みの相談、礼儀作法やお金の価値を教える、学校や近所で問題が起った時の対応などを、父親、母親、祖父、祖母などの誰がやっているかについて、日本人と在日韓国・朝鮮人家族に違いはみられなかった(図3、図4)。子どもの躾の殆どを母親が担っており、礼儀作法と金銭の価値を教えることについて、父親の出番がほんの少し増えるという結果であった。日本人と在日韓国・朝鮮人家族の違いで注目されたことは、祖父母の分担の割合である。在日韓国・朝鮮人家族の場合、祖父母がやっているという項目が多く、その躾の内容は、部屋の整理整頓、帰宅時間、礼儀作法、お金の価値、近所との対応の5項目であった(図4)。一方、日本人家族で祖父母がやっているという項目は、学校の問題の対処と礼儀作法の2項目のみであった(図3)。このことから直ちに家族機能や家族関係の文化的な違いなどを考察することはできないが、子育てにおける祖父母の果たす役割という点で、示唆に富んだ結果と考えられる。

全般的に、日本人の父親も在日韓国・朝鮮人の父親も、愛情のある模範的な父親として子どもとの関係を持っていた。彼らは、子どもが良いことをしたら褒めてやり、子どもとの約束を守り、子どもにするなど言ったことは自分もしないようにし、もっと子どもの相手をしてやりたいと考えていた(図5)。子どもとの心理的な距離の面で、日本人と在日韓国・朝鮮人の父親の間に差がみられた。意見がくい違ったとき子どもの意見を良く聞いてやるという父親は、日本人に較べて在日韓国・朝鮮人が多かった。それを裏付けるように、子どもの考えていることが解らないという父親は、在日韓国・朝鮮人が日本人に較べて少なかった。在日韓国・朝鮮人の父親は、日本人の父親に較べて、行動面で毎日の子どもとの関わりは少ないが、信頼感あるいは心の絆をしっかりと持っていると考えられる。日本人の父親も、全般的に良い父親である点では在日韓国・朝鮮人の父親と相違はないが、子どもの意見を良く聞くことが比較的少なく、そのため少数ではあるが、子どもの考えている事が解らず、子どもとの関係によそよそしさを感じている父親がいた。こうした心理的な距離を埋めるため、日本人の父親は会話や食事など、子どもと行動をともにしようと努めていると推測することもできる。

父親が子どもに期待する人間像は、日本人、在日韓国・朝鮮人ともに思いやりのある人、責任感のある人、友達がたくさんいる人、粘り強い人であった(図6)。

この結果には、思いやりがあり、友達をたくさん持つことによって豊かな人間関係を築き、責任感を持ち、粘り強く物事に取り組んで生きてほしいという父親の気持ちが表れている。有意差が見られたのは、いろいろなことに積極的に取り組む人を期待することで、日本人が在日韓国・朝鮮人に比べて多かった。

父親の教育観では、日本人、在日韓国・朝鮮人ともに、高い学歴より専門的な技術を身につけさせるのがよい、という堅実な考えが多くみられた。子どもの教育に体罰は必要であるという回答も2割程度あった。差がみられたのは、男らしさ・女らしさを身につけさせることが大切であるという回答で、在日韓国・朝鮮人が日本人に比べて有意に多くみられた。梁愛舜(1999)は、在日朝鮮人1世のコスモロジーの研究の中で、儒教的家族における女性の立場について次のように述べている。儒教の信念のなかでもとくに「孝」の精神は政治社会生活のすべてに優先し、家族関係に直接関わる「父子有親」、「夫婦(男女)有別」、「長幼有序」を柱とする。「夫婦(男女)有別」は、家族の日常生活において家族をさまざまに区切り、女性には「従順」こそが最高の徳として求められ、女性は従順と貞節を生命以上に大切にしなければならないという。梁の研究対象は在日1世であったために、祖国朝鮮における儒教の教えの影響を強く受けられていると考えられ、また、この儒教的道徳は時代的にも遡らなければならない。このため、日常生活の中で儒教の影響が強かったことは容易に推測できる。本調査の対象は全員が在日2世・3世であったため、日本の戦後社会の急激な近代化のなかで、儒教精神における男女の区別に関する意識はかなり変容していると考えられる。しかし、日本人との間に明らかな差が見られたことは注目すべきである。この男女観について、現在の在日韓国・朝鮮人の父親世代と子ども世代にギャップが生じる可能性は大きい。

3. 父性性の民族間差と世代間伝承

父親としての自己像(図8)では、在日韓国・朝鮮人は、仕事熱心で、子ども好きで、優しくはあるが厳しくもあるという自己像を描いていた。日本人の自己像にははっきりした傾向は見られず、やさしく、子ども好きで、話しやすいという自己像の反面、自分勝手に怒りっぽいなどの自己像が混在していた。この日本人の父親の自己認識は、蛭田(2001)らが1998年に、製薬会社4社の子どもを持つ男性社員を対象に行った調査結果と同様の傾向を示していた。在日韓国・朝鮮

人は「仕事熱心」という回答が、日本人に比べて著明に多く、在日韓国・朝鮮人の父親は、仕事に打ち込むことによって子どもと家族のために経済的基盤を作り、子どもと家族を保護する強い父親というはっきりした目標を持っているように考えられる。一方日本人の父親は、父親の子育て参加を望む昨今の世論に答えようと、新しい父親像を模索しているのではないかと考えられる。

小さい頃の自分の父親のイメージ(図9)は、対象者の幼少の頃、すなわち30年ほど前の対象者自身の父親の姿を思い起こしてもらったものである。仕事熱心で厳しく頑固な父親であったというのが、日本人と在日韓国・朝鮮人に共通したイメージであった。30年前というと、日本はちょうど経済の高度成長期のピークに達しており、父親達は高度成長を続ける経済の支え手として、諸外国から「エコノミックアニマル」と呼ばれるほど仕事に没頭していた時期である。1960年に発表された経済審議会の「国民所得倍增計画」に基づいてスタートした経済政策は、平均年率10%を超える世界に例を見ない経済成長をもたらした。今日の日本の豊かな経済生活はここに基盤があり、これはもっぱら、男性勤労者によって支えられていたのである。在日韓国・朝鮮人の男性勤労者もこの経済政策に組み込まれていたことはいうまでもない。蛭田(2000)は、戦後の日本の家族福祉政策の分析のなかで、男性は常に経済成長の担い手として私生活を忘れて働くことを期待され、家族福祉の対象として男性に焦点が当てられることはなく、父親は家庭団欒を犠牲にしてきた、と指摘した。本調査の対象が持っていた自分の父親に対するイメージは、このような社会経済的背景における父親像を如実に描いている。

著明に差がみられた回答は「尊敬できる」というもので、在日韓国・朝鮮人は日本人に比べて2倍以上の対象者(40.5%)が、自分の父親を尊敬できると回答したことは注目に値する。梁愛舜(1999)は、朝鮮半島の儒教的家族について、社会秩序を安定させる基盤として父子関係を最も重要視すると解説している。彼女は、儒教的家族における父と子の関係は、「孝」の具体的な行為を子に要求すること、すなわち子は父に対して心から尊敬すること、「親孝行をしたい」という意識を持つことであるという。許棟翰(2002)もまた、儒教の教えの日韓の違いに関する論説において、韓国では自分の主張を抑制し、父母の命令を厳守するのが子供たる者の道理で、「孝道」であると教えられると述べている。本調査の在日韓国・朝鮮人の父親は、

この儒教精神をしっかり受け継ぎ、家族の中の確たる父親像を持っていると考えられる。彼らは、仕事熱心で厳しく頑固な父親を尊敬の目で見育て、自分自身も仕事熱心で優しくはあるが厳しい父親であろうとしている。在日韓国・朝鮮人の父親は、父性性を世代間で伝承していると考えられる。ひるがえって、日本の父親はどうであろうか？ 日本でも戦前は韓国・朝鮮におけるように、儒教精神に基づいた家族関係や親子関係がしっかり社会に根づいていた。しかし、敗戦を機に、アメリカの占領政策によって日本人の道徳観や価値観は大きく変化し、家父長制に基づいた家族関係は姿を消した。現在では、日本の家庭でも学校でも、父親の絶対的優位性や男女の区別、長幼の序列などの道徳観を厳しく教えられる機会は殆どなくなった。本調査の日本人の父親は、仕事熱心で厳しく頑固な父親を見て育ち、がんばり屋で頼りがいがあつたと思つているが、自分自身は仕事に没頭せず子供好きで優しい父親になろうとしている。彼らが、自分の父親とは違つた、新しい父親のあり方を探しているのであれば、最も身近な妻はその努力を評価し、支えなければならぬ。

父親の子育てにおける民族性の違いや民族間の融合などを分析した結果を比較することによって、日本の父親、在日韓国・朝鮮人の父親の子育ての特徴が明らかになった。このことから、親が自らの民族性に誇りを持ちそれを顕示しながら、一方で異なつた民族性を認め尊重し、互いに学び合うことによって、多様で豊かな子育ての道が明らかになると考えられた。

謝 辞

本調査にあつて、快く協力して下さつた日本人および在日韓国・朝鮮人の父親の皆様、また調査

票の配布回収の労を取つて下さつた在日韓国・朝鮮人学校の諸先生方に心より感謝申し上げます。

本稿を作成するにあたり、ご指導下さつた本学学長堺俊明教授、増田芳雄客員教授に深謝申し上げます。

引用文献

- 花沢成一：母性心理学，医学書院，東京，1992
- 蛭田由美：父親の子育て参加に関する研究——首都圏を中心とした勤労者家族の調査から——，大正大学大学院文学研究科社会福祉学専攻修士論文，2000
- 蛭田由美，平山宗宏：父親の子育て支援に関する研究——首都圏を中心とした勤労者家族の調査から——，日本保健福祉学会誌，7：19-30，2000
- 蛭田由美，寺内文敏，平山宗宏：父親の子育て支援に関する研究，母性衛生，42：386-393，2001
- 法務省入局管理局：平成14年末現在における外国人登録者統計について（概要），<http://www.moj.go.jp/PRESS/030530-1/030530-1.html>，2003
- 許棟翰：日韓両国の相違点を儒教文化の違いから読み解く，Active，4：25-30，2002
- Mitscherlich, A.: Auf der Weg zur Vaterlosen Gesellschaft, Ideen zur Sozialpsychologie, R. Piper & Co. Verlag. 1963, 小見山実（訳），父親なき社会——社会心理学的思考——，新泉社，1972
- 日本女子社会教育協会：家庭教育に関する国際比較調査報告書，1995；厚生省（監），平成10年版厚生白書，ぎょうせい，1998
- 梁愛舜：在日朝鮮人のコスモロジーと郷村社会——「儒教的家族」の信念体系と行動様式——，立命館産業社会論集，35：51-75，1999
- 総務庁青少年対策本部：日本の父親と子供——アメリカ・西ドイツとの比較——，「子供と父親に関する国際比較調査」報告書，1987
- 高畑 幸：階層の壁と民族の壁——在日韓国朝鮮人親族の生活史から——，Sociology Today，11：21-35，2000